地域論の試み —郷土学について—

国安　寛

1.　設立構想と郷土学

一般に「郷土学」を提示しても大方理解に苦しむと思われる。これは広くいえば、地域論の一つである。

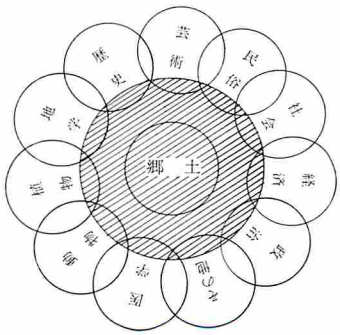
博物館建設に当って、1972年３月に「秋田県立綜合博物館　設立構想」が、倉田公裕氏を中心とする設立構想委員によって提示された。このことについて事務局では1975年３月開館を前に「設立構想によって秋田県博のあるべき姿が示された。討議の末全体としてこの構想を受け入れ、できるだけこれに従った形で建設を進めてきた。また、今後の運営の基本線とすることも再確認された」（部内コピー「地域研究」）という総括がなされた。これについては、受けとめ方に多少の個人差はあるにしても、開館後の今日も基本的に維持・発展させることで共通理解に達している。

「設立構想」の「基本理念」の項に、郷土学に関することが述べられている。郷土学の目的は「郷土学（秋田学）とは……自然とそこに生まれ育った人間の文化を客観的に知ることである。即ち、郷土学（秋田学）とは秋田とは何かを問うことである。即ち、この問には二つの問題が含まれる。その一つは秋田とはどの様なものであったかということ、今一つは秋田とはどの様なものであるべきかということであろう」とし、また、秋田を日本や世界の全体の中に位置づけてみることであり、偏狭なお国自慢や盲目的信仰を否定し、客観性をもつべきことも述べている。

この「秋田とは何か」という問に答えるために「綜合」的であるべきことを強調する。一つは、第１図のように、「綜合博物館においても、従来の並存的集合ではなく、郷土誌（Heimat Kunde）を中心とした、つまり秋田学を中心とした、綜合博物館を考えるべきである」(設立構想）として、綜合博物館の基礎学としての郷土学があるとする。二つには、同図のように「秋田の風土学であり、秋田の自然と、そこに生まれ育った文化を特定の課題として、人文諸科学と自然諸科学の接点を積極的に作り、秋田風土を軸にした、横割りの学問であろう」(同上）として、諸学綜合の基礎学としての郷土学を提示する。三つには、第２図のように、「現在の学問系列の諸学を、秋田という風土（郷土）による綜合である。つまり、諸専門（Fach）を、秋田という郷土において有機的統一を図ることである」（同上）とし、諸学綜合の基礎事実としての郷土（秋田）を位置づける。

第１図　総合博物館とは

第２図　郷　土　学



「設立構想」より

このように提示された郷土学（秋田学）は、秋田の未来像を模索し積極的に創りあげようとする目的であり、また諸学の分化そして細分化の進む現在の学問状況の中では、その目的を達成するために、新しい方法、つまり、秋田の自然と人間を総体的にとらえようとする綜合化の路線も有効な方法であることを大いに認めるものである。

しかし、「設立構想」に示された郷土学をわれわれは完全に理解したわけでもなく、いくつかの克服すべき点をももっている。今、二・三あげておきたい。

まず一つは、諸学綜合の基礎学としての郷土学（秋田学）と諸学統合の基礎事実としての郷土（秋田）の二つの範疇をどう考えたらよいかということである。感覚的には納得できても、論理の上では二つのものは一応異質であり、その関連性をつきとめる必要があると思う。われわれは、郷土学（秋田学）の組成に立ち向うべきであるのか、また秋田という場を綜合的に解明すべきであるのか、これによって今後の研究の方向も大分違うものと思う。

また、郷土学（秋田学）を実学と判断して進むべきか、または純理論学とおさえてかかるべきかの問題もある。しかし、一方において、そのような従来の学的発想では新しい学問の創造ができないという考え方もうなづける。

第二点は、郷土学はお国自慢的ではいけないし、客観的科学的でなければならないとする。この点についても了解している。しかしこうした立場はすでに戦前の郷土教育運動以来、とくに戦後の新しい郷土史（誌）や地方史の警句として大きく取り上げられてきた。しかし、なお現実にお国自慢が一般民衆から消去されないのはなぜか、単に愚として退ぞけてよいものか考えるべきである。われわれは科学の名のもとに切り捨てたものがないかを、もう一度点検すべき時期に達していると思う。その中には新しい立場で再構成できる考え方や資料も混入してはいまいかと、危惧するものである。

いずれ、われわれ学芸担当は、「設立構想」を土台として郷土学という地域論を展開して行かなければならない。これは秋田県博の常の課題としてこれからも続けられるべきものであろう。

2.　郷土学研究会

1973年１月、展示基本設計の説明も終り、出張も少ない冬期間に、最も原理的な基本理念である郷土学を中心とした部内研究会を発会させたいという声がでた。

そこで、全員が順番にそれぞれの立場から郷土学を中心とした問題を提起し、全員による自由討議を行なうことになった。これは、学芸担当の自主的な研究会として発足したもので色々な問題もあるが、現在８回目を数えるに至っている。

いま、研究会の動向と問題点を、①開催年月日、②主テーマ、③提起理由、④提起者とテーマ、⑤討論の問題点、を中心として、提示したい。

〔第１回〕①1973年１月31日
②戦前の郷土研究および教育
③戦前にも多くの郷土研究・教育および郷土学の労作があった。それを批判的に継承する。
④イ．富樫泰時　芳賀登著「地方史の思想」を読んで
　ロ．国安　寛　1930年代の郷土研究・教育と秋田県の動向
⑤イ．ハイマートとドイツの情勢、ロ.「郷土」の語源、ハ．郷土読本と郷土教育、ニ．地域論

〔第２回〕①1973年２月８日
②、④、⑤は第１回と同じ、

③郷土研究や教育は、地理学および地理教育の面からも戦前以来提起され、労作をもっている。とくに、小田内通敏氏が戦前に「郷土学」を提言している。それを含めた諸問題を、秋田市内在住の地理研究者（斉藤実則氏を中心とする）と合同の研究会をもつ。

〔第3回〕①1973年11月5日
②風土論
③「設立構想」に「郷土誌（Heimat Kunde）とは、風土学である。風土とは上述の如く歴史的風土であり、風土的歴史である」と述べている。つまり郷土学の探究の場合に、風土学の理解なしには考えられない大きな柱である。
④イ．加藤万太郎　和辻「風土論」
ロ．富樫　泰時　NHKTV市民大学講座「和辻風土論」（紹介）
⑤イ．風土学史について、ロ．和辻の欠落部分、ハ．和辻の観念的性格、ニ．和辻の風土論と文化論

〔第4回〕①1973年12月27日
②柳田国男の郷土論
③柳田国男は多くの郷土史（誌）論を展開している。とくに民俗学の立場からの郷土論はどのように特色づけられるかをさぐる。
④イ．木崎和廣　柳田国男と郷土史
ロ．嶋田忠一　（補足提言）
ハ．富樫泰時　「シンポジューム柳田国男」を読んで
⑤イ．郷土誌（史）について、ロ．官吏としての柳田と農民観、ハ．柳田の方法論―既成論理の無視、対マルクス主義、常民―、　ニ．柳田史観

〔第5回〕①1974年5月27日
②生態学
③郷土学とりわけ綜合化の方法として、生態学的方法論が有効な武器であり、また人文系担当のこの学の理解を得るためにも提示された。
④イ．高田　順　博物学および生態学的なものの見方について
ロ．高橋雅弥　梅棹忠夫著「文明の生態史観」について
⑤イ．本草学における博物学的視点　ロ．生態学の概念、ハ．人間生態学、ニ．世界の地帯論

〔第6回〕①1974年7月8日
②綜合郷土研究―秋田県―
③戦前、県段階においての郷土研究は、上記に集大成された。これは、前記小田内氏の指導があり、郷土学を基底とする研究でもある。今回その内容の取りあげ方や綜合化を中心として、方法論を学ぶことにした。
④イ．鎌田重光　綜合郷土研究と男鹿―地理学より―
ロ．渡部　晟　綜合郷土研究と自然科学
⑤イ．地理学と郷土誌、ロ．綜合郷土研究と人文および自然科学、ハ．「設立構想」の綜合論

〔第7回〕①1975年2月24日
②博物館学と専門諸学

③博物館における研究とは何か、「設立構想」にその特質が示されているが、さらに現場から再検討を加える。
④イ．鎌田重光　鹿角の地理的考察
　ロ．高橋雅弥　博物館の研究と大学における研究、総合化私見
　ハ．嶋田忠一　運動論と知的情報の生産
⑤イ．博物館と大学の研究―その異同―、ロ．学問(自然・人文)の特質、ハ．総合化―そのまとめ方―

〔第8回〕①1976年1月29日
②勝平版画と郷土学
③1976年5月より展示が予定されている勝平版画の郷土性をさぐり、あわせて、郷土文芸作家の体質を追求する。
④イ．塩谷順耳　勝平研究における総合化
　ロ．吉川欣一　秋田文芸作家と郷土
⑤イ．勝平得之の思想形成、ロ．勝平版画の発展度、ハ．秋田出身文芸作家の体質、ニ．秋田県博での郷土文芸作家の取りあげ方

以上のようになっているが、その成果と反省点をあげると、つぎのようになる。

一つは、人文と自然部門が同じ土俵の上で話し合う素地が生まれ相互理解の道が開けたこと。今一つは、郷土学・郷土史（誌）論・風土論・生態学および綜合化論などのいくつかの問題点が明らかにされたことである。

しかし、逆に克服しなければならない問題も多く発見された。現在考えられる問題点をあげると、郷土概念や地域概念が各部門ばらばらで、共通理解に達していないし、自然と人間の位置づけも、人文と自然系の分野で異なる把握の仕方をしている。これを定位におくことによって、綜合化が大分見通しをもつものと思われる。また、戦前の郷土研究、とくに綜合郷土研究の批判的継承も、全体としては不徹底であり、綜合化論も部分的には表出しているものの、多くは、各自の底に眠っており、つき合わせて共通の問題にするまでには至らない状態である。

今後の研究会のもち方としては、問題点を整理・分析し、明確なテーマを設定し、目的達成のための研究会とし、共通理解を拡大する。また、理論的な学習も継続しなければならないが、つぎにのべるような地域・課題研究の中間報告を行ない、共同研究と研究会を積極的に結びつけ、論点を具体的に示すことも研究会を発展させる一方法と考えている。

3．研究と展示

秋田県博における研究は、その前提に「設立構想」の「基本理念」が存在する。すなわち、秋田という地域を究明するのが、その目的である。その研究の成果を発表するのが展示である。

第1展示と第3展示は、他の項で取り上げているので、ここでは、第2展示（テーマ展示）のとくに研究にかかわる部分について述べることにする。

第2展示は、「設立構想」を受けて、開館展示以来、秋田を究明するのに最もふさわしいテーマであり、しかも、数部門できうれば全部門参加の共同研究の可能なテーマを選定し、研究の成果を展示する可動展示である。この方針の基本的な考え方は開館後の現在も変わらない。

そこではじめに現行第2展示「菅江真澄と秋田の風土―男鹿・八郎潟―」のテーマ設定と反省点をのべたい。

この評価なり反省なりは、本来学芸担当の共通理解のもとに述べるべきであるし、その企画もある。しかし、時間の都合でなしえず、個人的にならざるをえなかったことを了解されたい。

1972年5月上旬、いつくかのテーマ案が学芸担当から提案された。そして、つぎの四つにしぼられた。1.　菅江真澄と秋田、2.　秋田の四季、3.　地域研究―男鹿・八郎潟―、4.　こどもの四季、であった。そして、討議の末、1と3を合成したものになった。つまり、地域を限定すれば、綜合化に近づき易いという判断であり、地域選定については研究蓄積のある地域という条件もあった。

しかし、現実に「真澄」の研究誌を通じてといった場合、僅少の資料しかない部門があったし、また、とくにこの研究が、真澄研究か、真澄を通した男鹿・八郎潟か、地域研究としての男鹿・八郎潟か、の三つの課題を1本とし、それを煮つめなかったことが、結果的には三つの焦点で統一目標がかすむことになったと思う。

ともあれ、このテーマ設定によって、真澄に関する（とくに秋田）調査・研究について、自然・歴史・文化・生活などの項目を設定した。各部門がそれぞれを担当し、展示専門家の意見を聞きながら展示に結びつけていった。

完成した展示については、まず、真澄を通しての男鹿・八郎潟が、浮き彫りにされているかどうかを評価しなければならない。各部門の切り込みの多様性があって、一見、感覚的には距離を感じるが、やや詳細にみるとほぼ理解できるものと思う。また、自然と人間の接点を積極的に求めた部門もあるが、自然と人文科学のかみ合いは全体としてみれば2・3部門の単発で終り並列綜合といわれよう。

また各部門の切り込みの多様性は、部門のもつ学的性格もあって速断は許されない。ただし、およそ三つの型があり、これが混在しているようにもみられる。一つは真澄の取り上げた資料および周辺を展示したもの、二つにはその資料を専門の立場から分析したもの、三つには真澄のみた資料から地域性をさぐろうとしたものがあるとみられる。

これらは共に研究の方法上の問題にかかわるものである。とくに綜合研究の在り方を考える場合に、われわれが真澄展示を実施してえた到達点でもあったといえよう。時間不足を理由にするのは甚だ弁解がましい。今にして思えば、各部門が「何」を追求すべきか同一の視点をもつことが不可能であったかどうかが考えられる。また、各部門が分析の結果真澄から遠ざかって行く、それは当然であろう。しかし、帰るべき「何か」を意図的にもつことが不可能であったか、どうか。惜しまれることは、中間のつき合わせが甘かったことである。時間は無理すれば見出せるはずであった。われわれは、全体の場にだしたとき、己れの体系が崩れるのを恐れはしなかったか、また、他を傷つけたくないヒューマニズム？が働いたかであろう。結局、個に埋没して、全体像を見失なう結果になったのではなかろうか。

ともあれ、われわれは、学的分野の異なる共同研究を企画し、実施したことによって、博物館人として、また研究者として、研究の在り方を一つ学んだ。

つぎに開館後の研究計画については、予算要求などの事情もあって、1974年9月2日から立案が進められた。以下、成案に至るまでの過程を述べたい。

○第1次案（抜すい）

A　第2展示のための研究活動

1.　目　的

イ．秋田はどうであり、どうあるべきかを、自然・人文の面から綜合的に研究する。……郷土学

ロ．そのために地域研究を行なう。

ハ．その基底課題を「共同体」の解明とする。

2.　計画（各案）

イ．各地域を各部門集中して年次的に研究し、その累積の上に秋田をまとめる。

ロ．課題設定の上、各部門が各地域をえらび、その累積の上に、秋田をまとめる。

ハ．各部門それぞれ、秋田の地域、課題をえらび、自由に研究し、その上で綜合化をはかる。

ニ．菅江真澄、石川理紀之助等の人物を中心とした綜合研究。

という提案が研究担当から出されたが、目的の（ハ）は観点が狭いという理由で削除された。また、計画（各案）については、開館展示―菅江真澄と秋田の風土―の反省の結果、地域研究は独立させて地域を選ぶことにし、学芸全員からのアンケートから集約することにした。また、真澄研究の方は、継続することになり、課題研究の名称をつけることにした。

○第二次案　1974年10月7日（抜すい）

A　第2展示のための研究活動

2．計　画

イ．地域研究を主とし、共同研究を行ない、課題研究はチーム制として併行して行なう。

ロ．地域研究は①十和田地域②横手盆地③日本海岸の順序で、各地域4年間研究し、それぞれ2年後に基礎資料の展示、4年後に研究成果を展示する。

ハ．課題研究は、5年間真澄研究を行ない、随時、成果を展示する。その後は課題を設定して研究する。

という提案で、共同研究は、地域、課題の2つの研究を設定した。

○課題研究（案）1974年11月13日

1．名　　称　菅江真澄と秋田の風土―その2―

2．研究範囲　イ案．秋田全域、ロ案．県南、ハ案．月の出羽路、ニ案．県北

3．研究目的　真澄の秋田観を明らかにすると共に、それを通して、秋田を追求する。

4．課題と部門

イ．真澄のみた文化財→真澄の文化観（美術・工芸・考古・歴史）

ロ．真澄のみた生活用具→真澄の生活観（民俗・工芸・歴史）

ハ．真澄のみた自然→真澄の自然観（地質・生物）

の案が研究担当から提出され、2の範囲はイ案の秋田全域とし、3の目的や4の課題と部門についても意見がだされたが、大筋としてはこの方向で進むことにした。1975年3月5日、具体的作業として、先ず、真澄の秋田にかかわる総索引カード作製の具体案が示された。これを実施することに決定したが、本年度は予算や他展示の事情などにより、まだ着手していない。

○地域研究

これは、意見の調整が難航したが1975年1月27日次のような案が示された。地域は鹿角とし、その選定の理由として開館時の資料および研究の不備な地域、また秋田県域におけるやや異なる文化圏（南部藩時代など）として、研究の必要性をあげた。また研究時期を区分し、第1期研究として、自然環境・集落・文化の基礎研究を75年～76年行ない展示する案が提起された。

しかし、再度の意見調整が必要となり、1975年3月17日のつぎのような提案となる。これは、秋田県博における地域研究の経過・地域論・従来の地域研究をふまえて述べ、地域選定およびテーマに関しては、全員から意見を集め、その結果、1．鹿角（十和田～湯瀬）：火山灰土と南部要素、2．由利原：草原、3．大沢郷：里　としたが、1の鹿角地域とテーマを決定した。この案の火山灰土とは第四紀学を念頭においたテーマである。

以上のように課題・地域研究が学芸担当間でまとまった。両者の終局の目的は、秋田を究明し、われわれが基礎学＝郷土学（秋田）を樹立するために選定したテーマである。その相違点は、前者は人物を通して追求し、後者は秋田の中の地域を限定したこと。また、前者は人文系部門が主導し、後者は人文・自然が対等にしかも接点を求め合うこと。さらに前者は一応専門部門を解体し、文化・生活・自然のように大枠の中で調査・研究を行なうが、後者はあくまでも専門諸学に立脚しながら綜合化を意図していることである。何れこうした模索が当面必要であり、これが数年後一つの方向付けを得られることを予想して進めている。

この研究の成果を展示するのは、地域研究（鹿角地域の基礎展示）が77年に、課題研究（真澄）は78年と予定をたてた。

しかし開館後に同一展示の期間が長過ぎることが問題となった。これは、「設立構想」の第２展示の項に、可動展示で年間数回とあることと、県民の要望に答えるためには、ある程度の展示替えが必要であり、少なくとも年間２回という要望が館内から提起された。このため、急きょ、８月段階で研究・展示担当が取りまとめの作業にとりかかり、76年前半には、「勝平得之の作品と秋田」、後半には、「秋田の酒造展」77年前半には「小泉潟展―博物館周辺の自然と人文―」（仮称）を計画し、とくに目前の「勝平」展の調査・研究そして展示計画を併行して進めている。

勝平展について述べると勝平版画そのものは美術作品である。しかし今回は各部門による総合展示という方向でとらえた。その理由は、展示テーマにもあるように、「秋田」という郷土を主題とした作品が殆んどを占めているからである。現在いくつかの視点で調査・研究を進めているが、展示終了段階でまとめる計画をもっている。

次に、勝平研究の問題提起という意味で以下若干のべる。勝平得之（1904～1971）は大正・昭和のそれぞれの時期で、その時代や思潮とどのようなかかわり合いをもったかという視点も一つある。しかしこの時代性については、勝平版画の昭和史における存立基盤が客観的に存在したともいえる。極めて大まかにいえば、1930年代（1931年「雪国の市場」帝展入選）は、恐慌による農村問題そして郷土研究・教育の盛行がある。また、1930年代後半から1940年代前半は、戦場の兵士の郷土懐想と戦争遂行の母胎（食糧・人的資源）としての郷土が定立する。1940年代後半から1950年代前半は従来の国体観念が解体し身近な郷土が位置づけられる。また、1950年代後半から1970年代には高度成長下の郷土が見直される。いわば郷土がその時々において問題にされたし、なればこそそれを描く勝平版画が、そのときどきにおいて客観的に存立しえたわけである。

しかし勝平自身そのときどきにおいて主観的にどう受けとめたかについては、今後の研究によらなければならない。しかし、今いえることは、一貫して「かたくな」に、秋田という郷土を問いつづけたといわれることであろう。

勝平の主観世界は、秋田という「ふるさと」を、「安らぎ」・「平和」（「故郷異郷」定本柳田国男24巻）の永遠の相でとらえようとしたものと思われる。

ここで、郷土の観念的性格をもって、郷土学に代位させるつもりではない。なぜそのような観念が成立しうるかを、つぎの問題として考えるからである。われわれは勝平を通して秋田を追求するという基本的姿勢をもっている。

なお、この調査・研究および展示は、主として人文系の美術・工芸・歴史・民俗・考古の各部門が参加し、ときに応じて、自然系から応援を受ける体制である。しかし、これは必ずしも部門を基底とした参加方式をとらない。みる通り、かなりの距離をもつ部門もある。その場合は、部門研究で鍛え抜いた方法論を応用しながら、綜合研究・展示に参加している。こうした研究は美術展示では不可能である。ここにも、秋田県博の研究体制の１つの特色をみることができよう。